慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	あのころの高村先生
Sub Title	Preface: Old memories of our teacher Prof. Takamura
Author	服部, 謙太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1971
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.64, No.8 (1971. 8) ,p.515(1)- 516(2)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	高村象平教授退任記念特集号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19710801-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あのころの高村先生

服部謙太郎

高村先生が定年でおやめになるという。「もうそんなに経ったのか」というのが，まず起こる感想である。昭和25年から28年まで，私は三田の研究室にいた。31番教室（当時）や，今は取りこわされた古い研究室で，われわれは先生を中心に，いつも集まっていた。宇尾野，島崎，服部，宇治，金丸，中村，新保，速水，渡辺，これが当時の若手メンバーであった。三田の十勇士とでも言いたいところだが，残念ながらとてもそんな勢いはなく，野村大元帥の下に，ひれ伏していたのが実情であった。

当時，高村先生は，40代半ばの壮年期で，われわれを指導されるかたわら，またよく師匠野村先生に仕えておられた。野村先生の「古文書実習」には，つとめて列席され，大先生から，「高村君，君は案外読めないね」などと言われて，苦笑しておられた。そんな時，われわれは大いに先生を身近に感じたものだったが，しかし又，ある時は，野村大先生から，「君たちは高村君を若いと思ってるかも知れないが，あれはもう大家なんだからね」と，たしなめられたこともあった。ともかく，祖父と父と孫10人が同居していた，この大所帯の研究室生活は，悲喜交々の小事件を織りまぜて，なかなかに思い出多き時代であった。

そもそも私が高村先生に入門したのは，それより10年も前のことであった。本科２年に進んだ春，昭和15年４月のことである。その前年，先生は教授に昇任されて，初めて独立の研究会を持たれたばかりで，おそらく35歳にもならぬ，全くの新進教授であった。その時まで，私は先生について何も知らなかった。本科１年の「一般経済史」は，ＡＢＣ組が野村教授，ＤＥＦ組が高村教授というように，分担されていて，私はＣ組だったため，野村先生の講義をきいた。これはなかなか名講義で，私もそれに惹かれて，ぜひ先生の研究会にはいりたいと思った。

ところが，当時の学生間には，「ノムケンはこわい」という風評が高く，それが尾ヒレをつけて宣伝される上に，先生も時間中にしばしば雷を落とされたから，私もだんだんこわくなってきた。そして誰か他に，もう少しこわくない経済史の先生はいないものかと考えた。Ｄ組の友だちに相談したら，「俺の方は高村さんというのだ。若いが皮肉屋で面白いよ」と言うので，その先生にきめた。その年，入門したのは，たしか５人であった。３年生も５，６人で，全体としてかなり小人数

の研究会であった。それだけに，先生の指導も綿密で，きびしくもあった。私はこの先生のもとで，ドイツ経済史を専攻した。その動機がまた極めて非学問的で，ドイツ語を使ってみようということであった。当時，学生の間では，第2外国語のドイツ語やフランス語の書物を読むことが，畏敬(?)の目を以て見られていた。それで私も，それをやってみようと思い，そのためにドイツ経済史を選んだのである。

私たちのクラスは，先生の研究会の2回目の卒業生である。野村・高村合同研究会の時代から数えれば，4回目ということであるが，いずれにせよ，高村門下の「高弟」であることに変りはない。先生もまだ若かったし，私より上級生は，先生との年齢差は更に少なかったわけだ。「ナーニ，高村さんには教わったというより，共に学び，共に遊んだ仲さ」と，ある上級の先輩が，一ぱい機嫌で言ったことがあるが，実際，そんな感じだったのかもしれない。しかし，私どものクラスからは，「共に遊ぶ」どころか，教えを受けた「コワイ先生」という印象のほうが強い。してみると，この間のわずか一両年の間に，高村先生の領主的権威は，完全に確立されたということであろうか。

先生は昭和36年，野村先生の逝去と相前後して，塾長に就任された。これはわれわれにとって，全くの驚きであった。高村先生と塾長とは，どうしても結びつけて考えることができなかった。山梨県に住む先輩の元研究会員が，新聞でこの報道を見て，どうしても信じられず，「新聞にも誤りはあるから」と，わざわざ汽車賃を払って上京し，塾監局にいって問い合わせて，はじめて納得したという，笑い話さえ生まれた。先生はもとより一介の学究ではない。多方面の才能の持主であり，特にその事務的手腕の抜群であることは，「社会経済史学会」の運営を通じて，われわれもよく知っていた。それなのに，先生が塾長になるなどとは，一度も考えたことがなかった。それは，おそらく，われわれにとって，先生が余りに身近な存在であったために，塾長という特殊の地位と，結びつけて考えることができなかったからであろう。

ともあれ，先生はよく塾長の大任を完うされ，それを境に，一段とスケールの大きな存在となられた。教育界の大立物として，広く社会に活躍されるようになった。それはわれわれ弟子どもにとって，まことに嬉しいことである。けれども，われわれの心に浮かぶ先生の映像は，常に塾長以前のそれであり，戦前，大仏裏のお宅で，いつうかがっても，勉強しておられたあの時代，戦後，荒廃した三田の研究室で，苦楽を共にしたあの時代の先生のお姿である。先生の御健康と，今後の御活躍を祈ってやまない。

(服部時計店副社長)

経済史四十年

高村象平

島崎教授や中鉢学部長から過分な紹介のおことばをいただきました。何かおしりのほうがむずむずする感じであります。

けさ，三田の図書館の前の石段を上がってまいりまして，ちょうど朝陽がさしておりましたが，感慨無量なものを味わいました。

数えてみますと，私は旧制の大学出身でございますから予科3年本科3年というわけで，その頃は日吉のキャンパスはなく，全部この三田の山の上で過ごしたのですが，それが6年間。続いて昭和4年の春から本年に至りますまでの教師としての42年間。合わせて48年というものをあの石段を上がったり降りたりしたのでありますが，これでもう頻繁に上がらないで済むようになるのかと思いますと，ちょっと妙な感じがいたしまして，涙もろければ泣くところでございましょうが，いまどきそういうのははやりませんようです。その他方におきまして，せいせいした気持ちもちょっとあるのは，困ったものでございます。

そこで，きょうは何をお話ししようか。当初島崎教授や中村教授から私の最終講演についてのお話を承りましたときは，即座に考えましたのが，「経済史四十年」という題ででもお話ししようかと申し上げたのでございました。それは，過去40年間における学問上の問題を中心にして，それに私の研究歴を織りまぜてお話ししたらいいのじゃないかと思ったからでありますが，その後だんだん考えている間にそれでは少々てまえみそが多くなり過ぎるんじゃないか。一体，手柄話というものはお聞きになる方にとってはいやなものであります。しゃべっている当人はいい気持ちになっているんですが，これほどいやらしいものはない。慶応義塾を去るに当たりまして，いやらしい男だったと思われたくない。

そこで，ちょうど私がこの大学に入るようになりましたころといってもいいし，あるいは，実際に研究者としてあれこれ首をつっこむようになりましたころといってもいいのでありますが，約40年この方のわが国における経済史の研究，特に私のやっております西洋経済史でございますが，その西洋経済史関係の研究の動向といったものをかいつまんでお話しし，それに将来はどうあってほしいかという私の感じておりますことを付け加えまして，若い方々に何らか御参考にでもなればと，